

表 1 調査概要（海域）

調査主体	調査点数	調査時期	調査層（COD、DO等）	
			表層	底層
国土交通省近畿地方整備局 神戸港湾事務所	11点	8/1	海面下2m	海底面上2m
第五管区海上保安本部	19点	8/1～2	海面下1m	海底面上1m
大阪府環境保全課	15点	8/1	海面下1m	海底面上2m(一部5m)
大阪府港湾局	4点	8/1	海面下1m	海底面上2m(DOは1m)
大阪府南部流域下水道事務所	16点	8/1	海面下1m	海底面上1m
(地独) 大阪府立環境農林水産総合研究所 水産技術センター	20点	8/5～6	海面下0m	海底面上1m(一部2m、5m)
大阪市環境局	6点	8/1	海面下1m	海底面上1m
大阪市港湾局	6点	8/1	海面下0.5m	海底面上1m
堺市環境局	4点	8/1	海面下1m	海底面上2m
兵庫県農政環境部環境管理局 水大気課	13点	8/1、7	海面下0.5m+2m 混合	海底面上1m
神戸市環境局	22点	8/1	海面下0.5m+2m 混合 (一部0.5m)	海底面上1m
西宮市環境局	6点	8/5	海面下0.5m+2m 混合 (一部0.5m)	海底面上1m
尼崎市経済環境局	3点	8/1	海面下0.5m、2m (一部0.5m)	海底面上1m
大阪湾広域臨海環境整備センター (尼崎沖)	4点	8/1	海面下0.5m、2m	海底面上1m
(神戸沖)	4点	8/1	海面下0.5m+2m 混合	海底面上1m
(大阪沖)	5点	8/1	海面下1m	海底面上1m、2m
(泉大津沖)	6点	8/1	海面下1m	海底面上1m、2m
阪神高速道路(株)	1点	8/1	海面下1m	海底面上1m
関西電力(株)	1点	8/1	海面下1m	海底面上1m
大阪ガス(株)	1点	8/1	海面下1m	海底面上1m
新日鐵住金(株)	1点	8/1	海面下1m	海底面上1m
JFEスチール(株)	1点	8/1	海面下1m	海底面上1m
東洋建設(株)	1点	8/1	海面下1m	海底面上1m
五洋建設(株)	1点	8/1	海面下0.5m	海底面上0.5m
日本ミクニヤ(株)	4点	7/31	海面下1m	海底面上1m
(株)環境総合テクノス	1点	8/1	海面下1m	海底面上1m
いであ(株)	2点	8/1	海面下1m	海底面上1m
環境システム(株)	3点	8/1	海面下0m	海底面上0m
兵庫県立尼崎小田高等学校	2点	8/3	海面下0.5m	海底面上0.5m
独立行政法人国立環境研究所	7点	8/1	海面下1m	海底面上1m
大阪市立大学	6点	8/1	海面下1m	海底面上1m
大阪府立大学	1点	8/1	海面下1m	海底面上1m(一部1.5m)
神戸大学	3点	8/1	海面下1m	海底面上1m
合 計	200点			

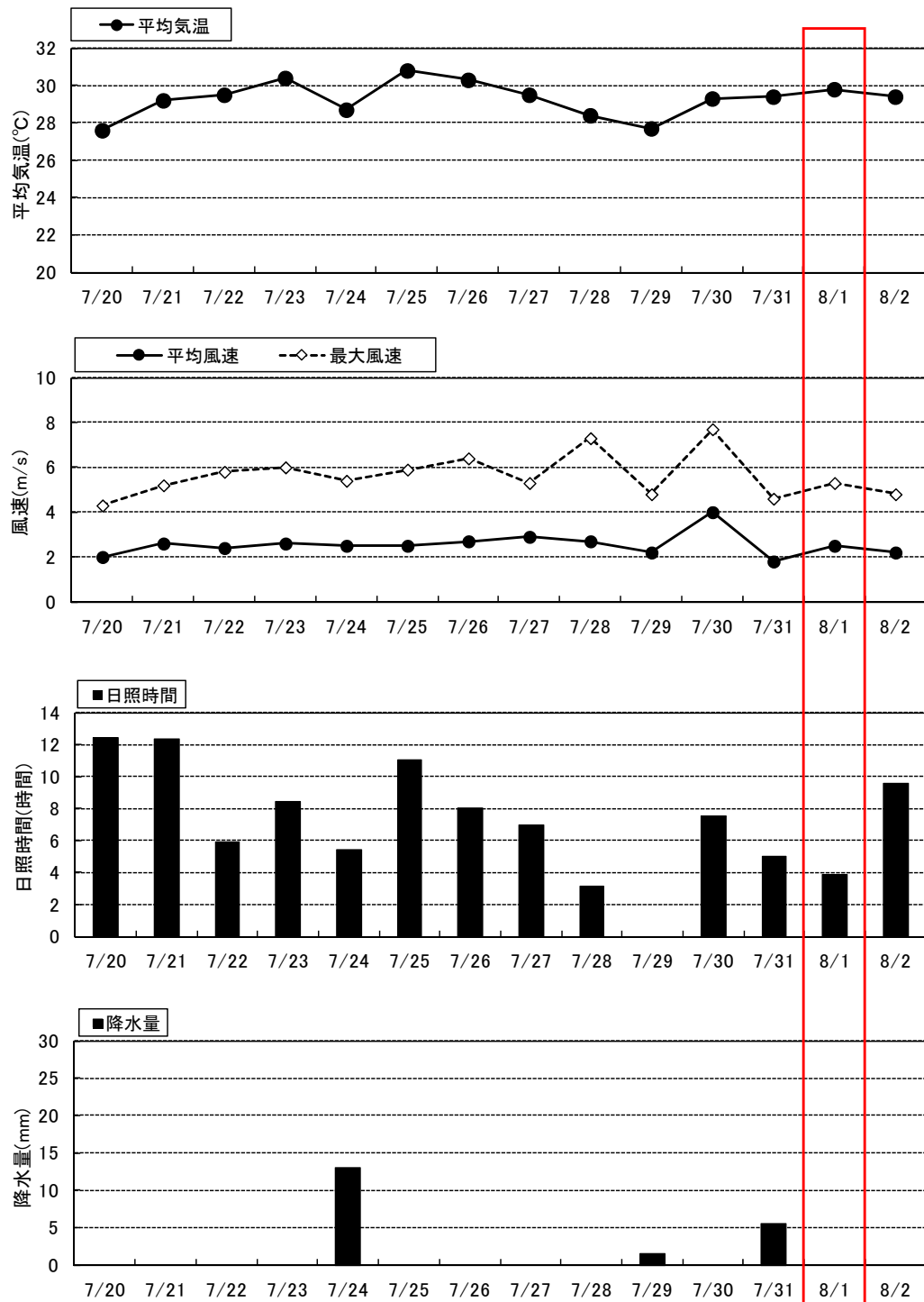
表 2 調査概要（陸域）

調査主体	調査点数	調査時期	備 考
国土交通省 近畿地方整備局	105点	8/1～14	淀川水系：91点 大和川水系：14点
大阪府	57点	8/20～21	
大阪市	21点	8/1、8	
堺市	22点	8/20～21	
岸和田市	11点	8/20～21	
豊中市	8点	8/20～21	
吹田市	3点	8/20	
高槻市	5点	8/20～21	
枚方市	16点	8/20～21	
茨木市	5 点	8/20～21	
八尾市	9 点	8/20～21	
寝屋川市	2 点	8/22～23	
東大阪市	4 点	8/20～21	
兵庫県	10点	8/7～8	
神戸市	12 点	8/7	
西宮市	15点	8/7、20～21	
合 計	305点		

平成25年度の調査結果

●調査日前後の気象状況

- ・調査前日の7月31日に5mm程度の降雨が観測されました。調査実施日の8月1日は曇で、前日と同程度の気温でした。風については、調査実施2日前に比較的強い風が吹いていましたが、調査当日は穏やかでした。

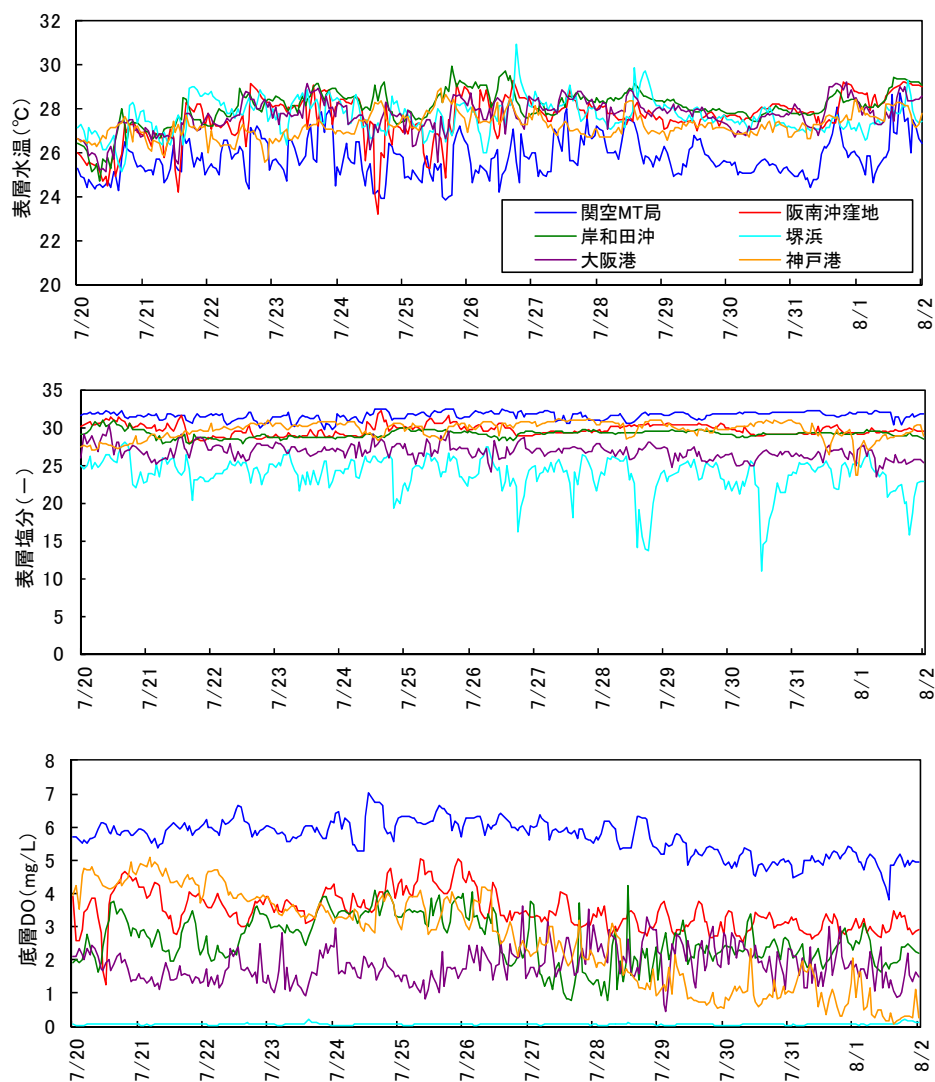


大阪湾再生水質一斉調査実施

図 2 調査日前後の気象状況（大阪管区気象台）

●調査日前後の水温、塩分、D O

- ・調査日前後の6地点で測定された表層水温、表層塩分、底層D Oの経時変化を示します。
- ・連続データでみると、表層水温、表層塩分、底層D Oは時間的に大きく変動していることがわかります。
- ・8月1日の表層水温、表層塩分は、7月20日以降の値と比較すると、表層水温はやや高め、表層塩分は同程度となっていました。
- ・底層D Oは、最も南側に位置する関空MT局では3mg/L以上で推移していましたが、阪南沖窪地では3mg/L前後、岸和田沖、神戸港では調査6日前頃から概ね3mg/L以下、大阪港では概ね3mg/L以下、堺浜ではほぼ0mg/Lで推移していました。



※表層：海面下1 m

※底層：関空 MT 局（海面下 19～23m）、阪南沖窪地（海面下 17～20m）、岸和田沖（海面下 8～13m）、堺浜（海面下 9～12m）、大阪港（海面下 10～13m）、神戸港（海面下 15～17m）

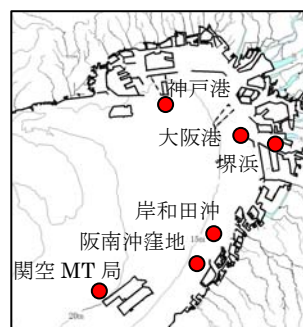
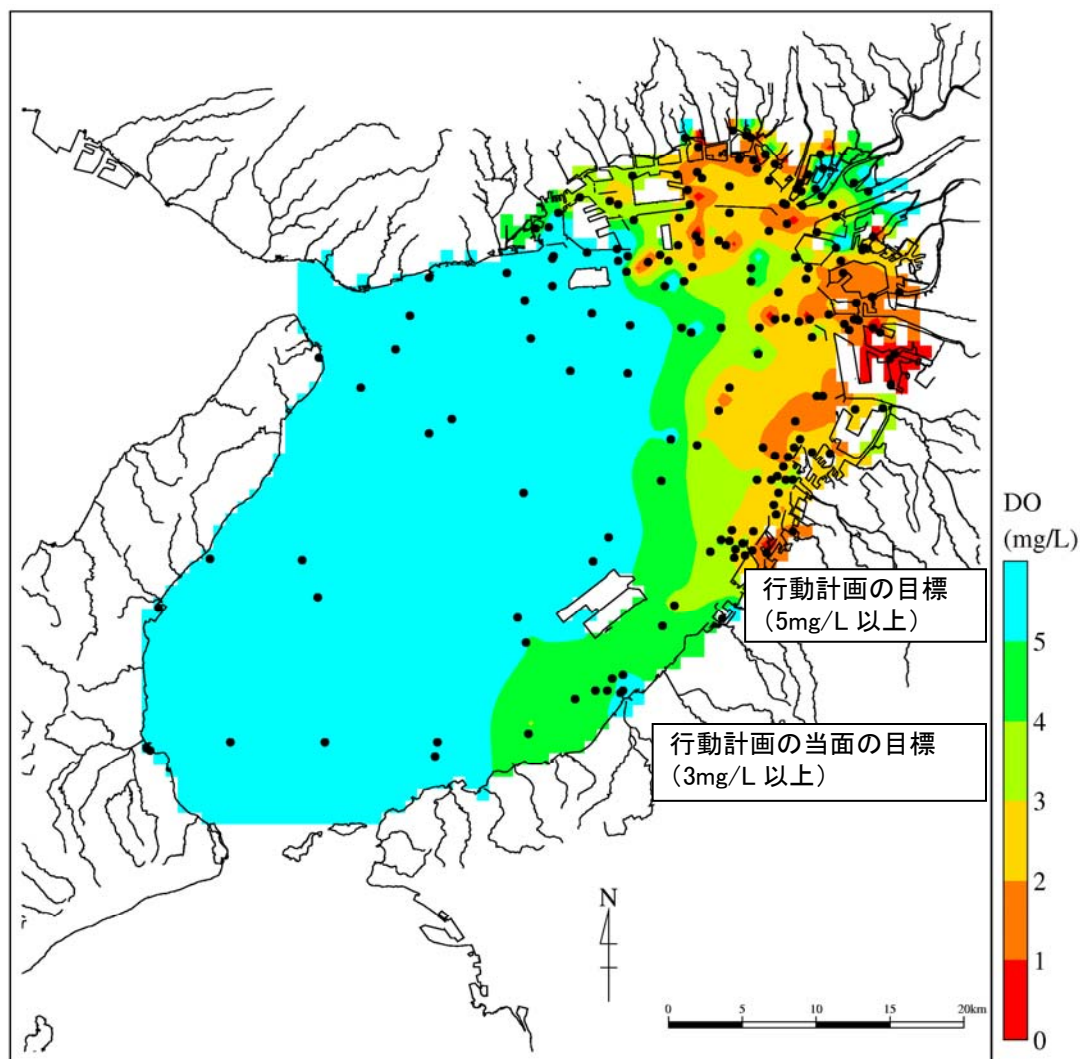


図 3 調査日前後の水温、塩分、D O

●底層の溶存酸素量（DO）

- ・底層のDOは、大阪湾北東側の多くの海域で3 mg/L未満の低い値となっていました。これは、大阪湾再生行動計画の目標値（当面の目標である3 mg/L）を達成していない状況です。
- ・一方、大阪湾西側の海域では、5 mg/L以上であり、東側と比較して高く、大阪湾再生行動計画の目標値（5 mg/L）を達成していました。



※等値線は、実測データを補間して作成しており、必ずしも実際の位置を示すものではない

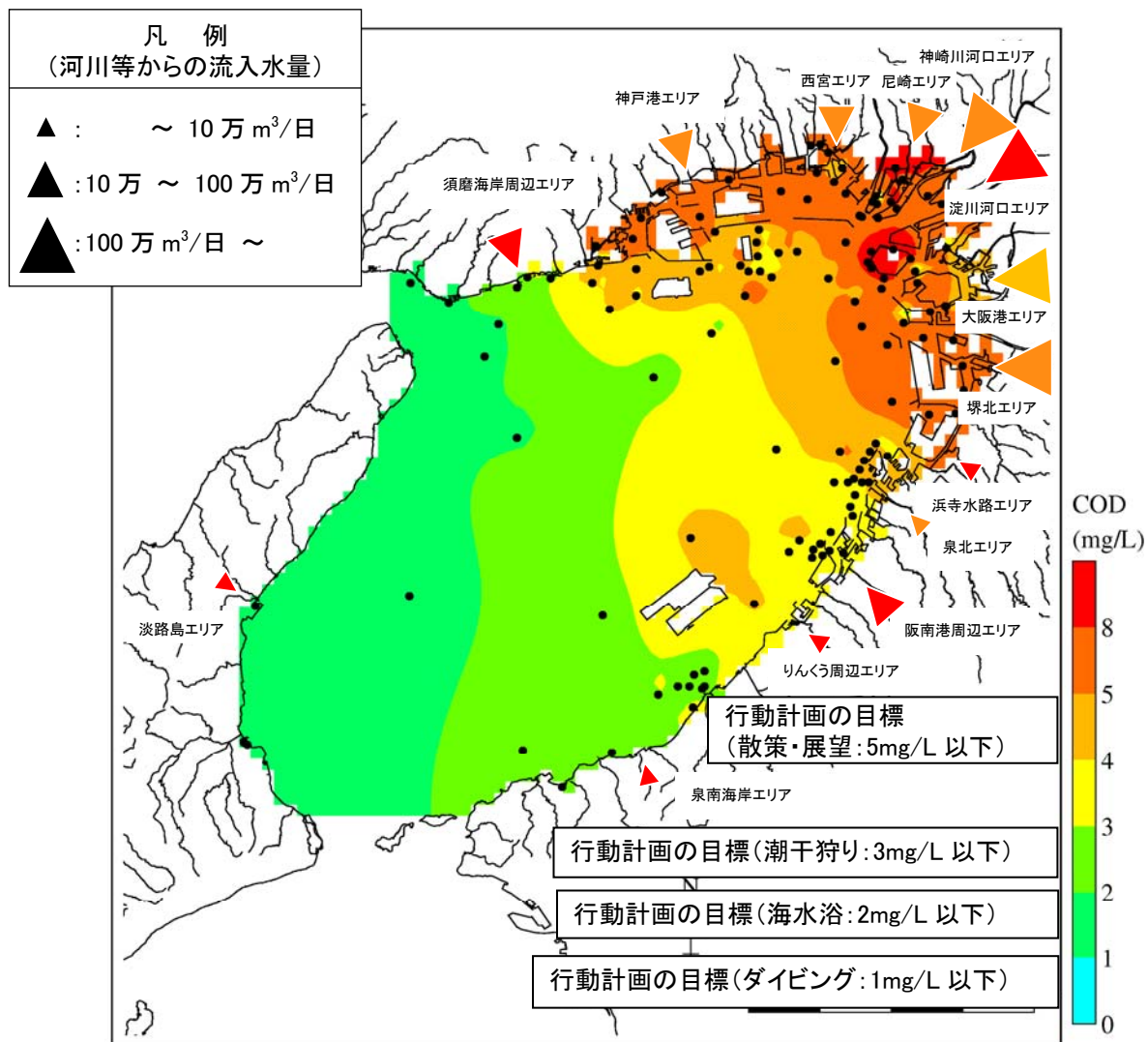
図 4 水質の水平分布（底層：DO）

【用語解説】

- ・溶存酸素量（DO）は、海水中に溶けている酸素量を示すもので、海域の生物生息環境状態を示す重要な指標です。
- ・大阪湾再生行動計画では、大阪湾において『年間を通して底生生物が生息できること』を目指し、「底層DOが3 mg/L以上」であることを当面の目標として掲げています。

●表層の化学的酸素要求量（COD）

- ・陸域からの流入負荷量は、淀川や大和川が流入する大阪湾北東側で大きくなっています。
- ・表層のCODは、陸域からの流入負荷量の多い大阪湾北東側の岸近くの海域を中心に5 mg/Lを超える高い値となっていました。これは、「散策や展望に適した水質レベル：5 mg/L以下」を達成していない状況です。
- ・一方、大阪湾西側では3 mg/L以下であり、東側と比較して低くなっていました。



※等値線は、実測データを補間して作成しており、必ずしも実際の位置を示すものではない

※陸域の水質は、エリア毎に次式で計算した

$$\text{エリア毎の水質} = \frac{(\text{各河川からの流入負荷量の合計} + \text{各下水処理場からの流入負荷量の合計})}{(\text{河川からの流入水量の合計} + \text{各下水処理場からの流入水量の合計})}$$

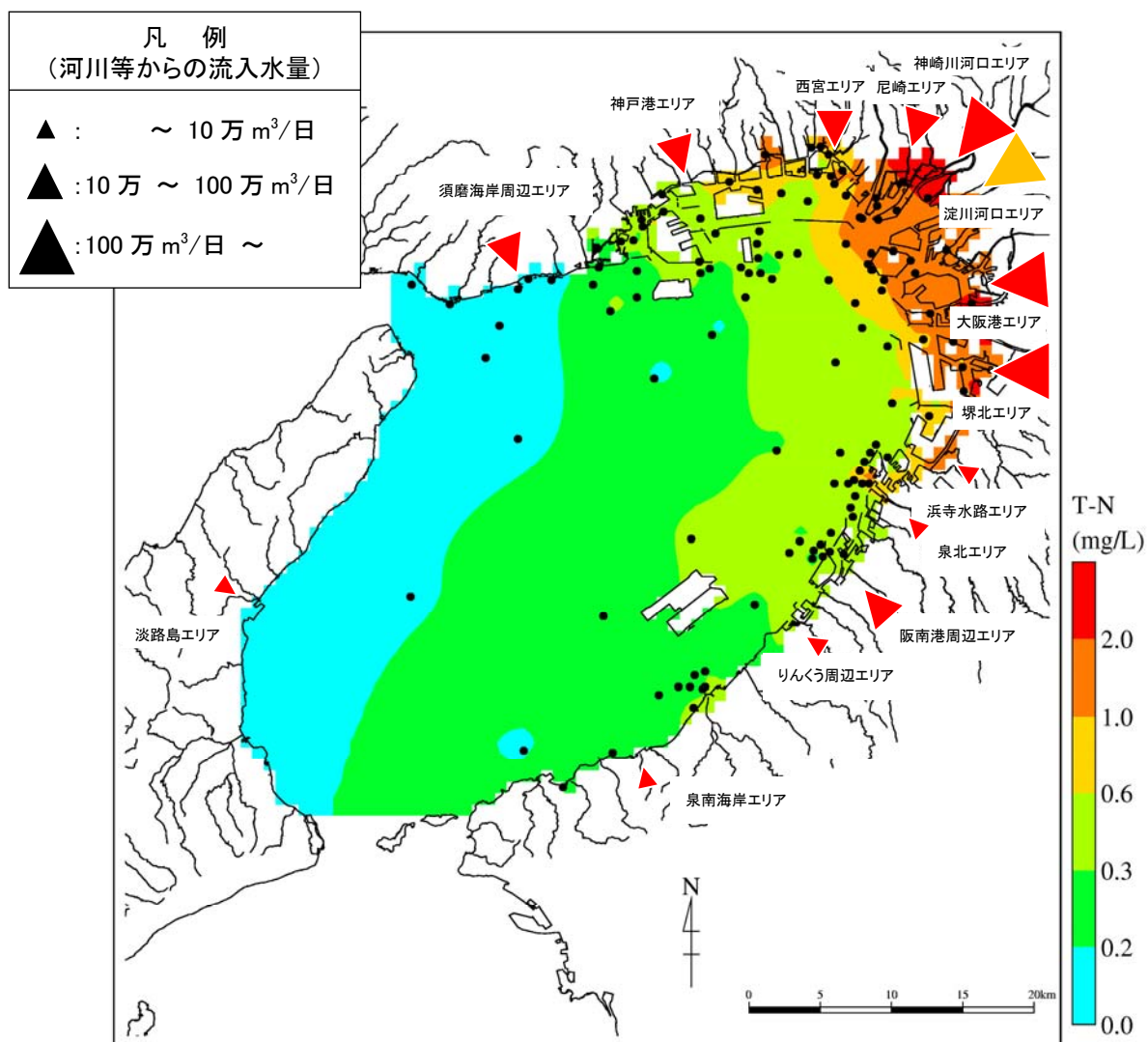
図 5 水質の水平分布（表層：COD）

【用語解説】

- ・化学的酸素要求量（COD）は、海域の汚濁状況を表す代表的な指標です。
- ・大阪湾再生行動計画では、大阪湾が「人々の親水活動に適した水質レベルとなること」を目指し、「ダイビングに適した水質レベル：1 mg/L以下」から「散策や展望に適した水質レベル：5 mg/L以下」まで利用に応じた水質目標を掲げています。

●表層の全窒素（T-N）

- ・陸域からの流入負荷量は、淀川や大和川が流入する大阪湾北東側で大きくなっています。
- ・表層のT-Nは、陸域からの流入負荷量の大きい大阪湾北東側の岸近くの海域で、 1.0 mg/L を超える高い値を示していました。
- ・大阪湾西側の海域では、 0.3 mg/L 以下であり、東側と比較して低くなっていました。



※等値線は、実測データを補間して作成しており、必ずしも実際の位置を示すものではない

※陸域の水質は、エリア毎に次式で計算した

$$\text{エリア毎の水質} = \frac{(\text{各河川からの流入負荷量の合計} + \text{各下水処理場からの流入負荷量の合計})}{(\text{河川からの流入水量の合計} + \text{各下水処理場からの流入水量の合計})}$$

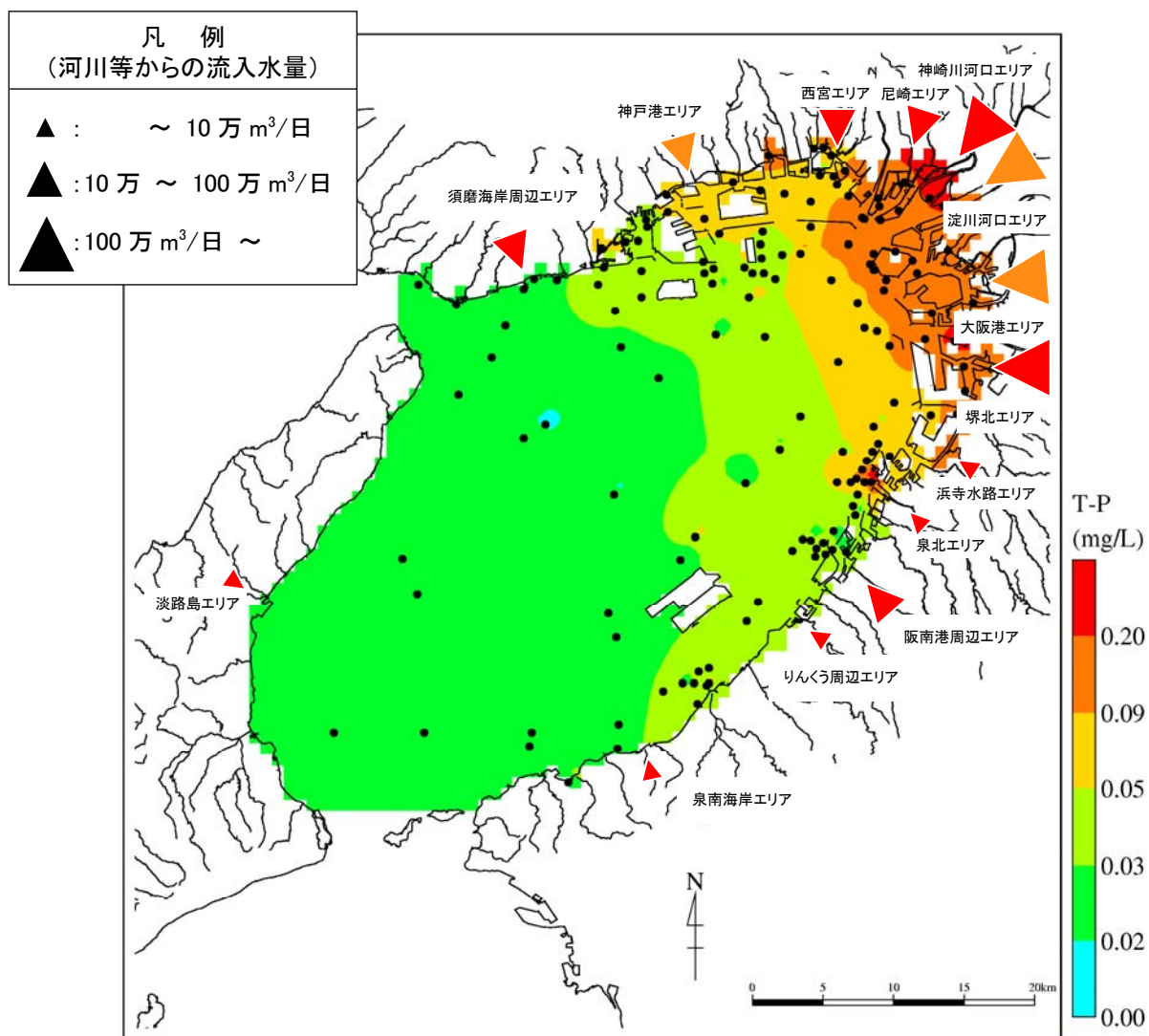
図 6 水質の水平分布（表層：T-N）

【用語解説】

- ・全窒素（T-N）は、海域の富栄養化状況を表す指標です。
- ・値が高いほど海域の富栄養化が進行していることを示します。富栄養化が進むと、植物プランクトンが増殖し、海中の有機物が増加するとともに、これらの有機物を分解する際に酸素が消費され、底層の溶存酸素量（DO）が低下します。

●表層の全リン（T-P）

- ・陸域からの流入負荷量は、淀川や大和川が流入する大阪湾北東側で大きくなっています。
- ・表層のT-Pは、陸域からの流入負荷量の大きい大阪湾北東側の岸近くの海域で0.09 mg/Lを超える高い値を示していました。
- ・大阪湾西側の海域では、0.03 mg/L以下であり、東側と比較して低くなっていました。



※等値線は、実測データを補間して作成しており、必ずしも実際の位置を示すものではない

※陸域の水質は、エリア毎に次式で計算した

$$\text{エリア毎の水質} = \frac{(\text{各河川からの流入負荷量の合計} + \text{各下水処理場からの流入負荷量の合計})}{(\text{河川からの流入水量の合計} + \text{各下水処理場からの流入水量の合計})}$$

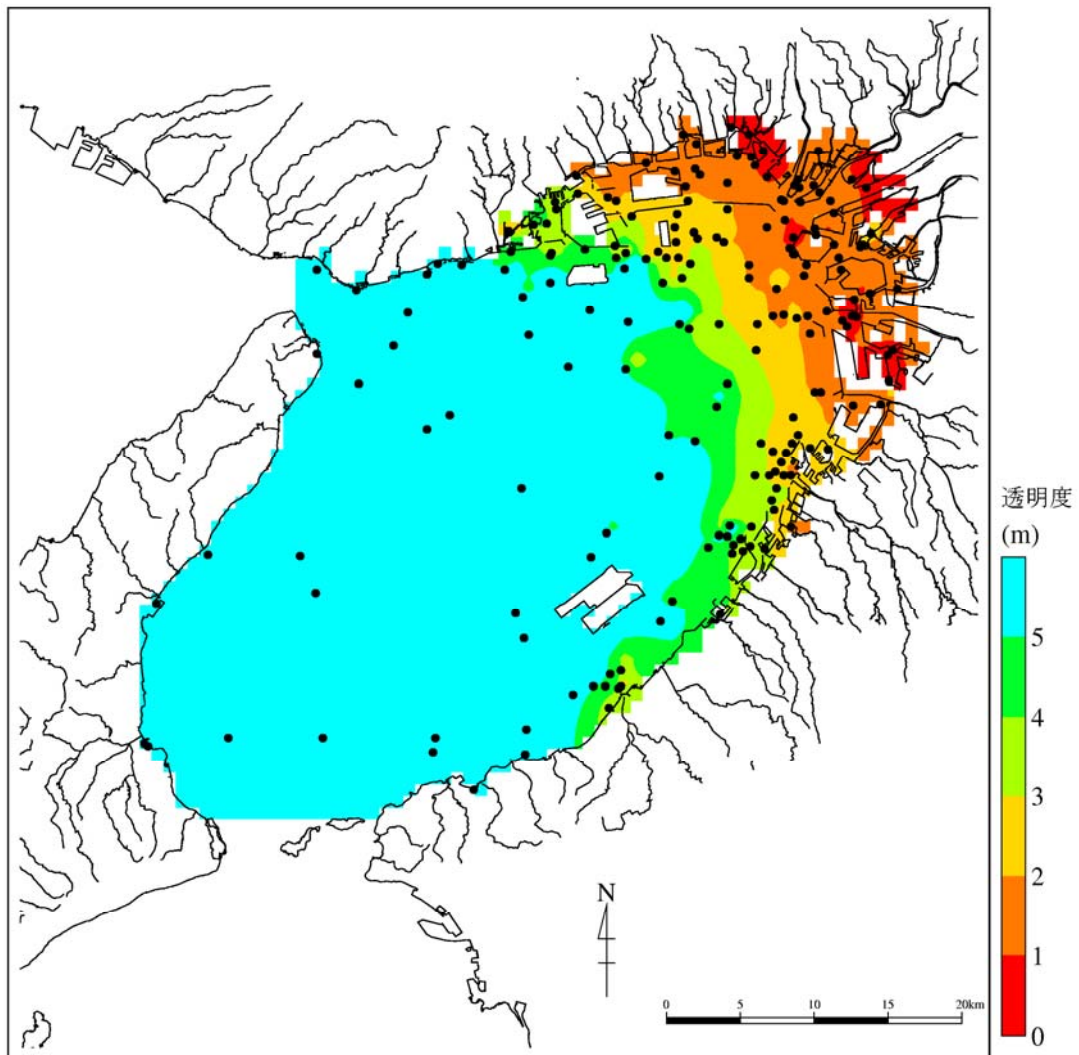
図 7 水質の水平分布（表層：T-P）

【用語解説】

- ・全リン（T-P）は、海域の富栄養化状況を表す指標です。
- ・値が高いほど海域の富栄養化が進行していることを示します。富栄養化が進むと、植物プランクトンが増殖し、海中の有機物が増加するとともに、これらの有機物を分解する際に酸素が消費され、底層の溶存酸素量（DO）が低下します。

●透明度

- ・透明度は、大阪湾北東側の海域では、3 m以下の低い値を示していました。
- ・一方、大阪湾西側の海域ではおおむね3 m以上であり、東側と比較して高くなっていました。



※等値線は、実測データを補間して作成しており、必ずしも実際の位置を示すものではない

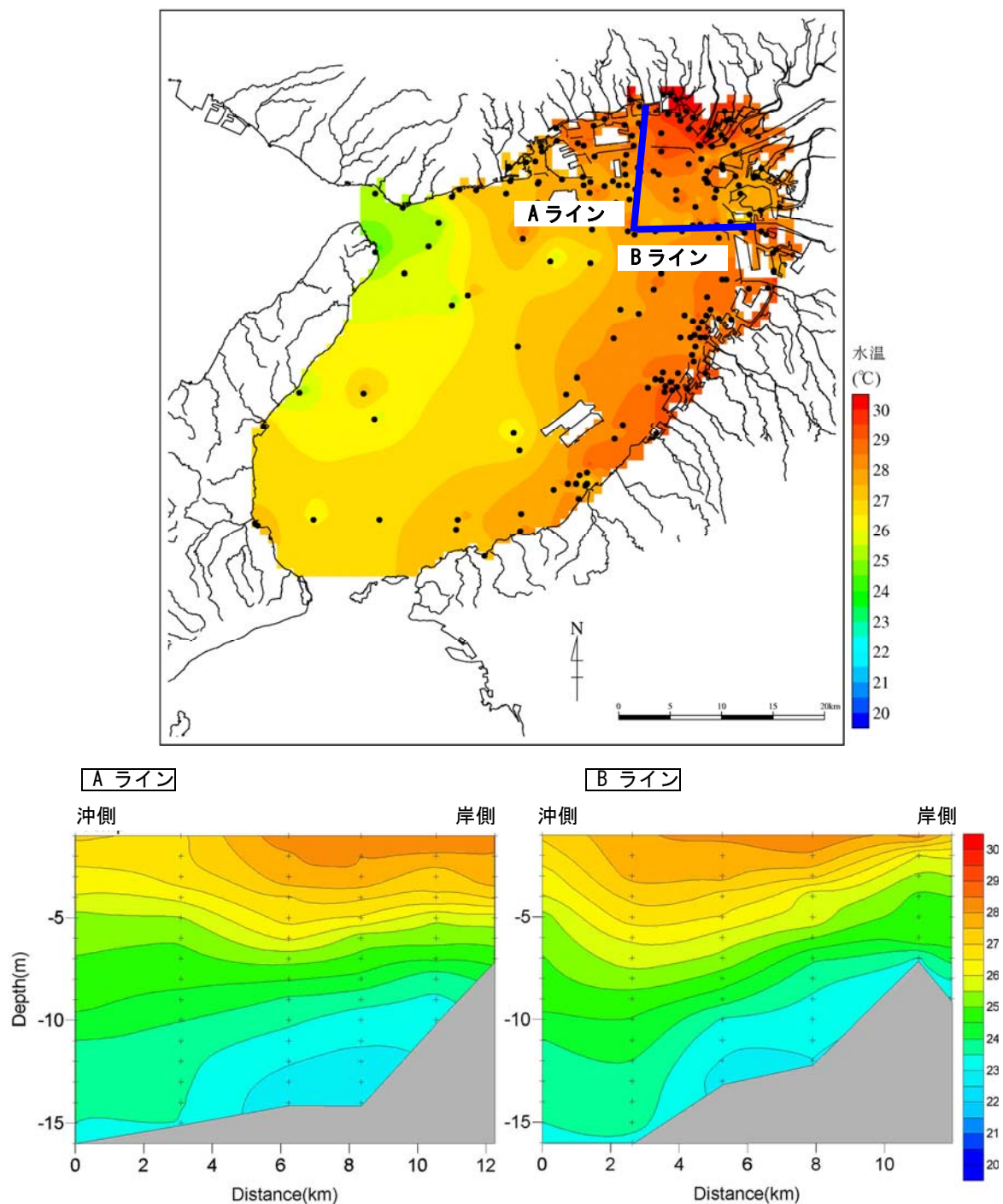
図 8 水質の水平分布（透明度）

【用語解説】

- ・透明度は、海や湖の水の透明さを表す指標です。
- ・値が低いほど水中に届く光の量が少なく、光合成を必要とする藻類などの水中植物の分布下限水深が浅いことを示します。

●水温

- ・表層水温は、測定時刻、測定水深により値が変動するため明確な傾向は見られませんが、約 24～32℃の範囲で分布していました。
- ・鉛直的には、表層で高く、海底に向かうほど低くなっていました。

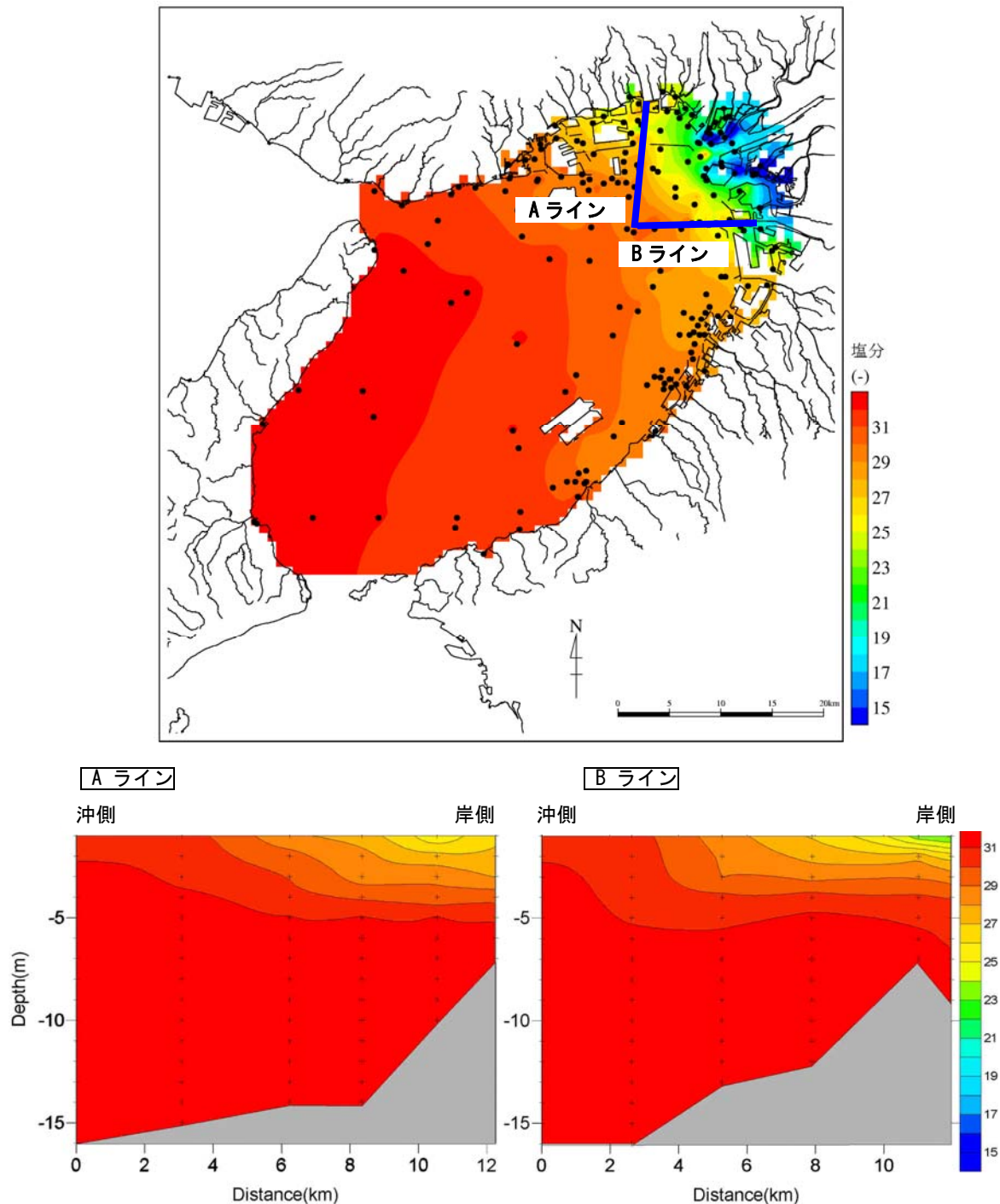


※等値線は、実測データを補間して作成しており、必ずしも実際の位置を示すものではない

図 9 水温の調査結果

●塩分

- ・表層塩分は、淀川や大和川の河川水が流入する大阪湾北東側で低く、西側で高くなっていました。
- ・鉛直的には、表層で低く、海底に向かうほど高くなっていました。



※等値線は、実測データを補間して作成しており、必ずしも実際の位置を示すものではない

図 10 塩分の調査結果

【用語解説】

- ・塩分は、淡水と海水の混ざり具合を示す指標です。
- ・値が低いほど淡水が多く含まれていることを示します。

過年度の調査結果との比較

●調査実施前の気象状況

- ・各年度の調査実施前2週間の気象状況（平均気温、平均風速、日照時間、降水量）は以下のとおりとなっています。
- ・平成16年度は、調査実施2～3日前に台風が通過し、強い風が連吹していました。
- ・平成17年度は調査実施7～8日前に、平成19年度は調査実施4～5日前に、台風が接近したため、強い風が吹いていました。
- ・平成18年度は、調査実施10～13日前に大規模な降雨がありました。
- ・平成23年度は、前線の影響により調査実施8～10日前、台風の接近により調査前日から当日にかけては、比較的強い風が吹いていました。
- ・平成24年度は、調査実施7日前及び4日前に、台風の接近による比較的強い風が吹いていました。
- ・平成25年度は、過年度と比較して降水量は少なくなっていました。また、低気圧や前線の影響で調査の14日前及び2日前に、比較的強い風が吹いていました。

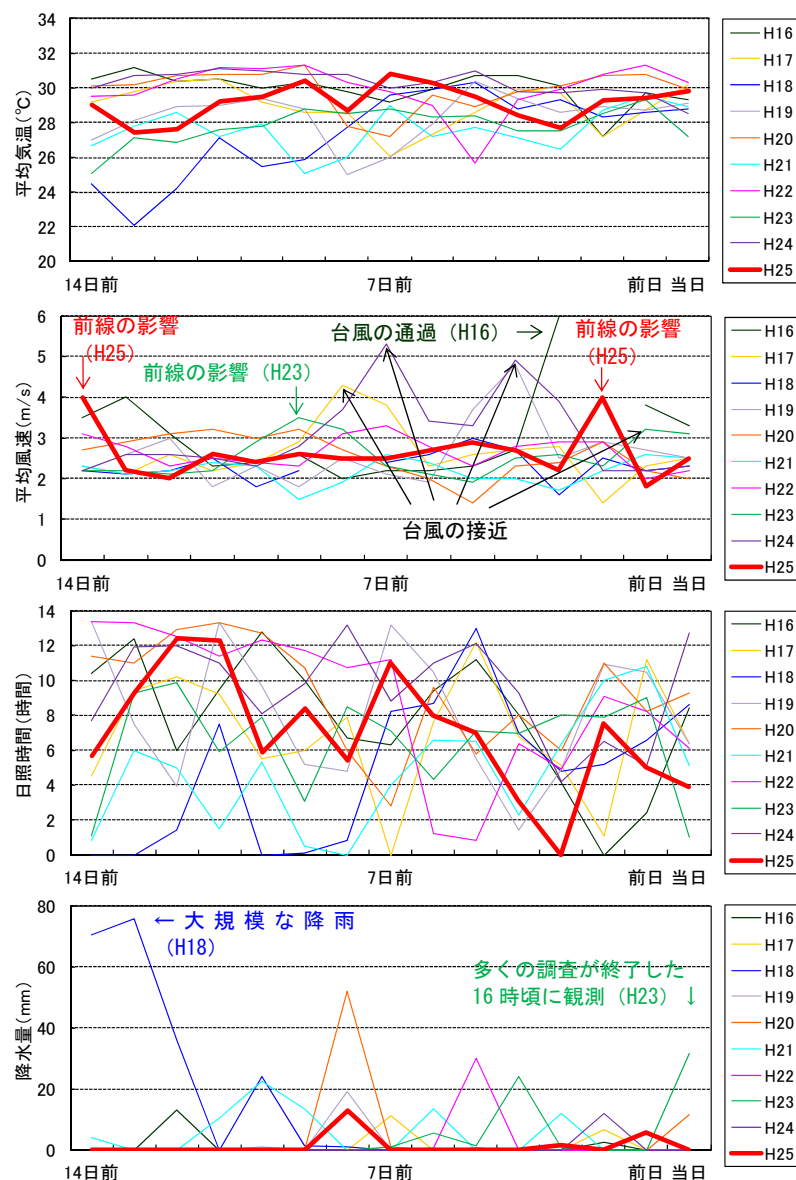


図 1 1 調査日前後の気象状況（大阪管区气象台）

●底層DOの水平分布図

- ・調査実施前に降水量が多かった平成18年度は、底層DOの低い水域（3mg/L以下）が湾中央部まで広がっていました。この要因としては、河川水の流入によって、陸域からの有機物が流入したことや、比重の小さい河川水が海水を覆うことによって、底層にまで酸素が供給されにくくなったことなどが考えられます。
- ・一方、調査実施前に風の強かった平成16年度、平成19年度は、底層DOの低い水域は岸近くにのみ見られました。この要因としては、風によって海水が上下に混合され、底層にまでDOが供給されたことが考えられます。
- ・平成25年度は、大規模な出水や強風等はみられず、平年的な分布となっていました。同様の気象条件であった平成17、20年度と比較すると、湾北東部で底層DOの高い海域が広がっていました。

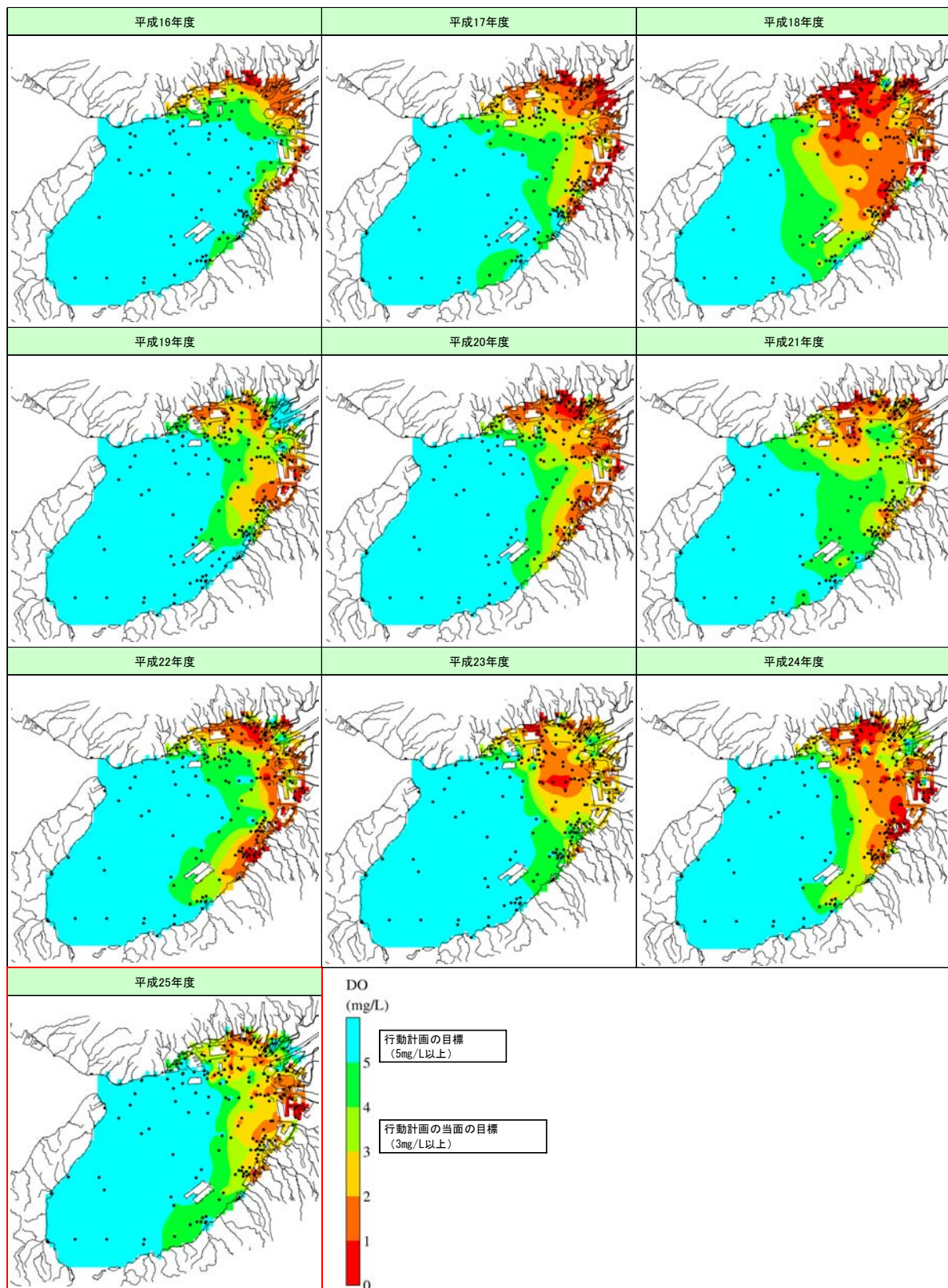


図 1 2 底層DOの水平分布図

●表層CODの水平分布図

- ・調査実施前に降水量が多かった平成18年度は、表層CODの高い水域（5mg/L以上）は湾北西部まで広がっていました。この要因としては、河川水の流入によって、陸域からの大量の有機物が流入したことが考えられます。
- ・調査実施前に台風が接近した平成16年度、平成23年度は、表層CODの高い水域は大阪湾北部の岸近くの海域にのみ見られました。この要因としては、風によって海水が上下に混合され、表層の高いCODが拡散されたこと等が考えられます。
- ・平成25年度は、大規模な出水や強風等はみられず、平年的な分布となっていました。同様の気象条件であった平成17、20年度と比較すると、湾西部で表層CODの低い海域が広がっていました。

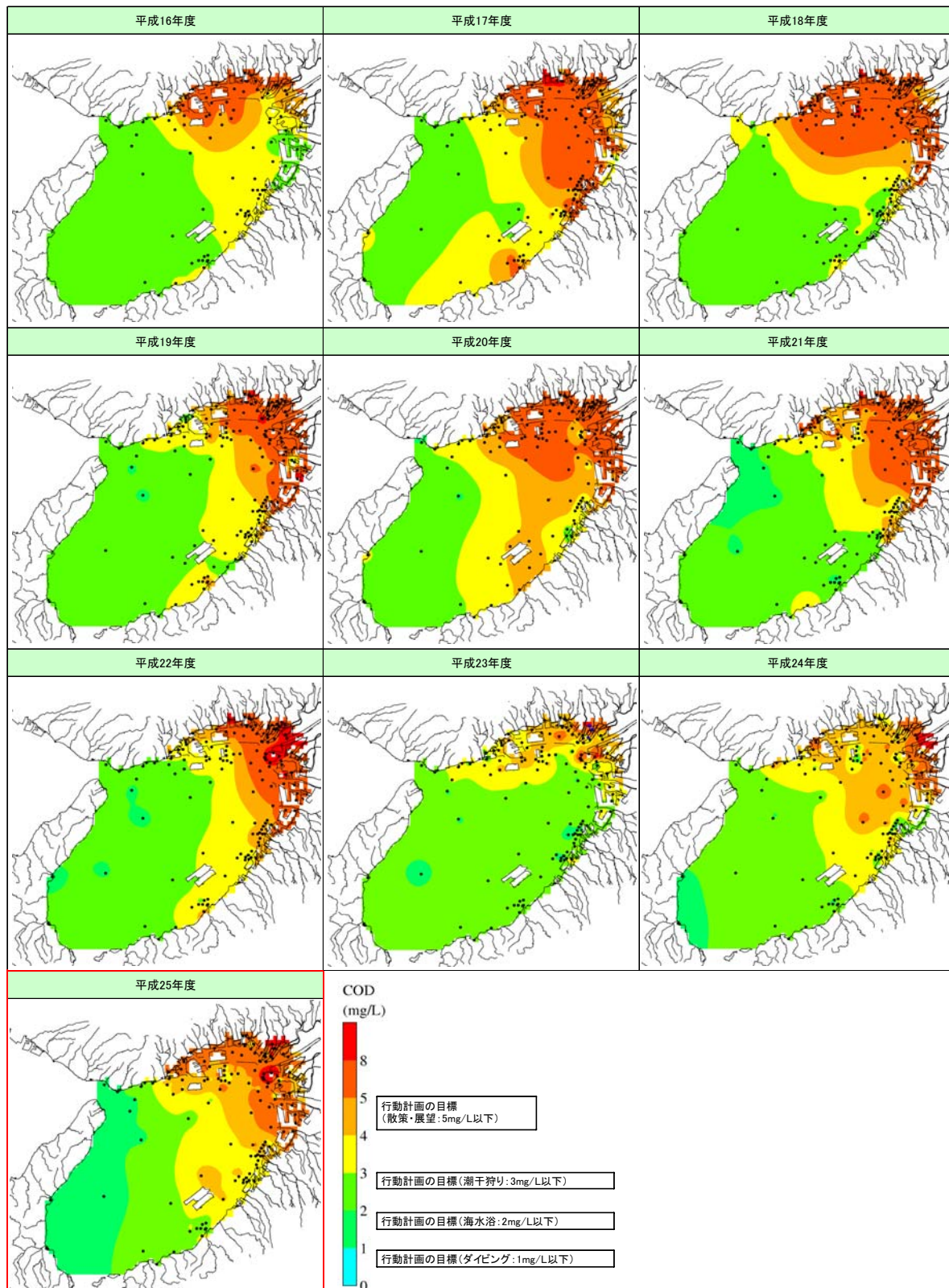


図 13 表層CODの水平分布図

水質の経年変化

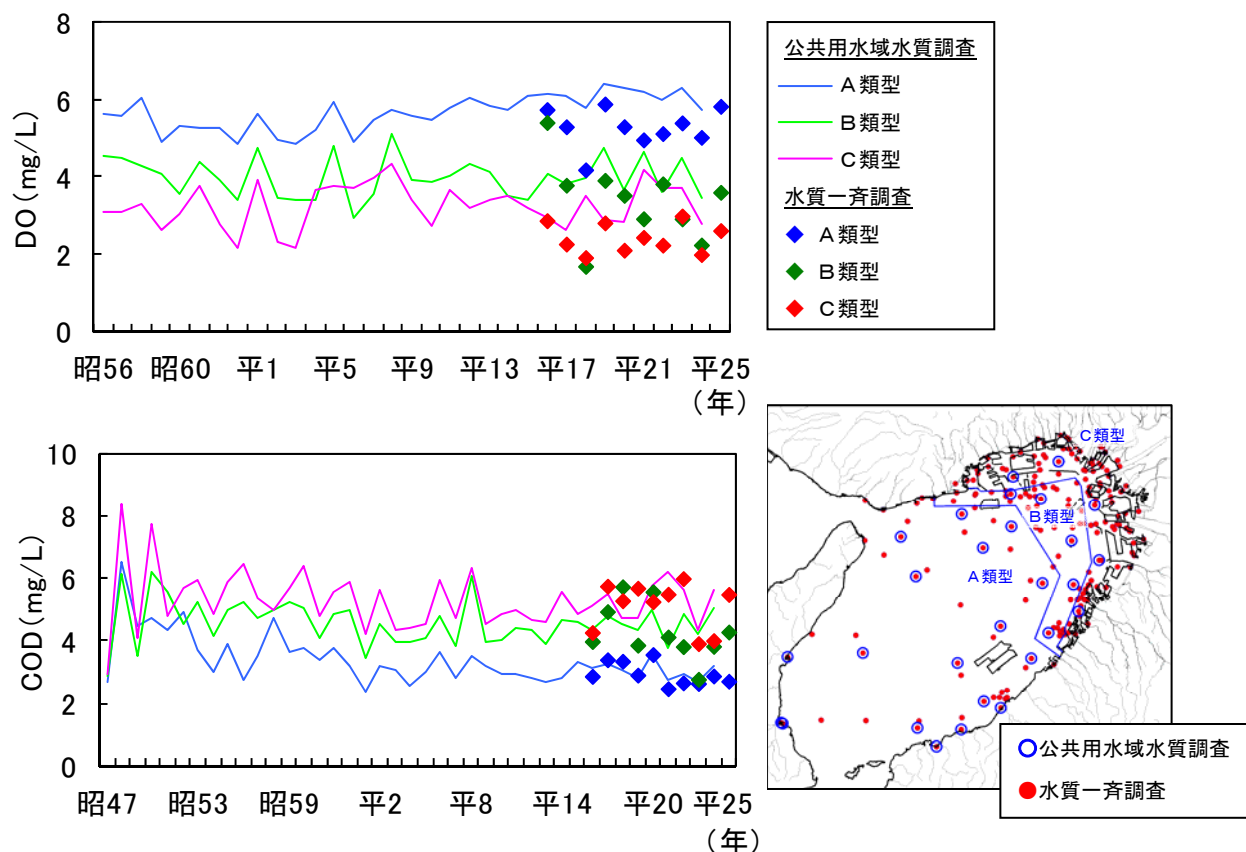
- ・大阪湾における水質の経年変化と水質一斉調査結果を比較するため、底層DOと、表層CODについて、公共用水域水質調査結果と水質一斉調査結果を併せて示しました。

●底層DO

- ・公共用水域水質調査結果では、昭和56年以降ほぼ横ばいですが、A類型海域は近年やや上昇傾向となっていました。
- ・水質一斉調査結果は、公共用水域水質調査結果よりも低い値を示していました。この要因としては、水質一斉調査が、貧酸素化が最も激しくなる8月のみの調査であることに加えて、公共用水域水質調査と比較して岸近くの調査地点が多いためと考えられます。

●表層COD

- ・公共用水域水質調査結果では、昭和47年以降減少傾向が見られましたが、近年は横ばいとなっていました。
- ・水質一斉調査結果は、公共用水域水質調査結果とほぼ同様の傾向を示していました。



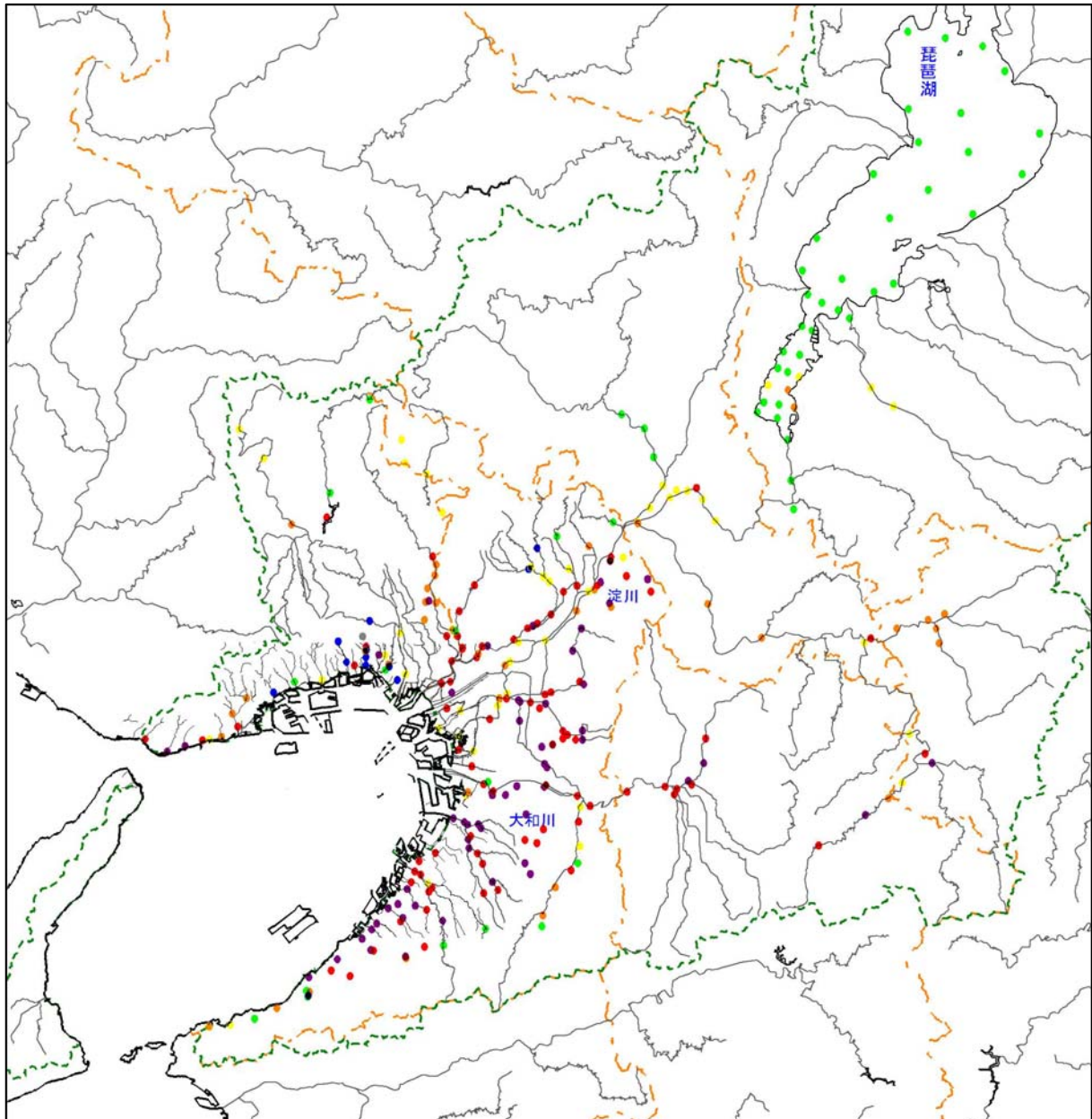
※公共用水域水質調査結果は、夏季の平均的な水質の経年変化を把握するため各地点の6～8月の平均値を環境基準の類型ごとに平均している。

水質一斉調査結果は、8月の1回限りの測定値を類型ごとに平均している。

図 14 水質の類型別経年変化

参考資料 1 : 陸域の化学的酸素要求量 (COD)

- ・ 陸域のCODは、琵琶湖ではほとんどの地点で2～3mg/L の値を示していました。また、河川においては、5～8mg/L の値を示す地点が多くみられました。



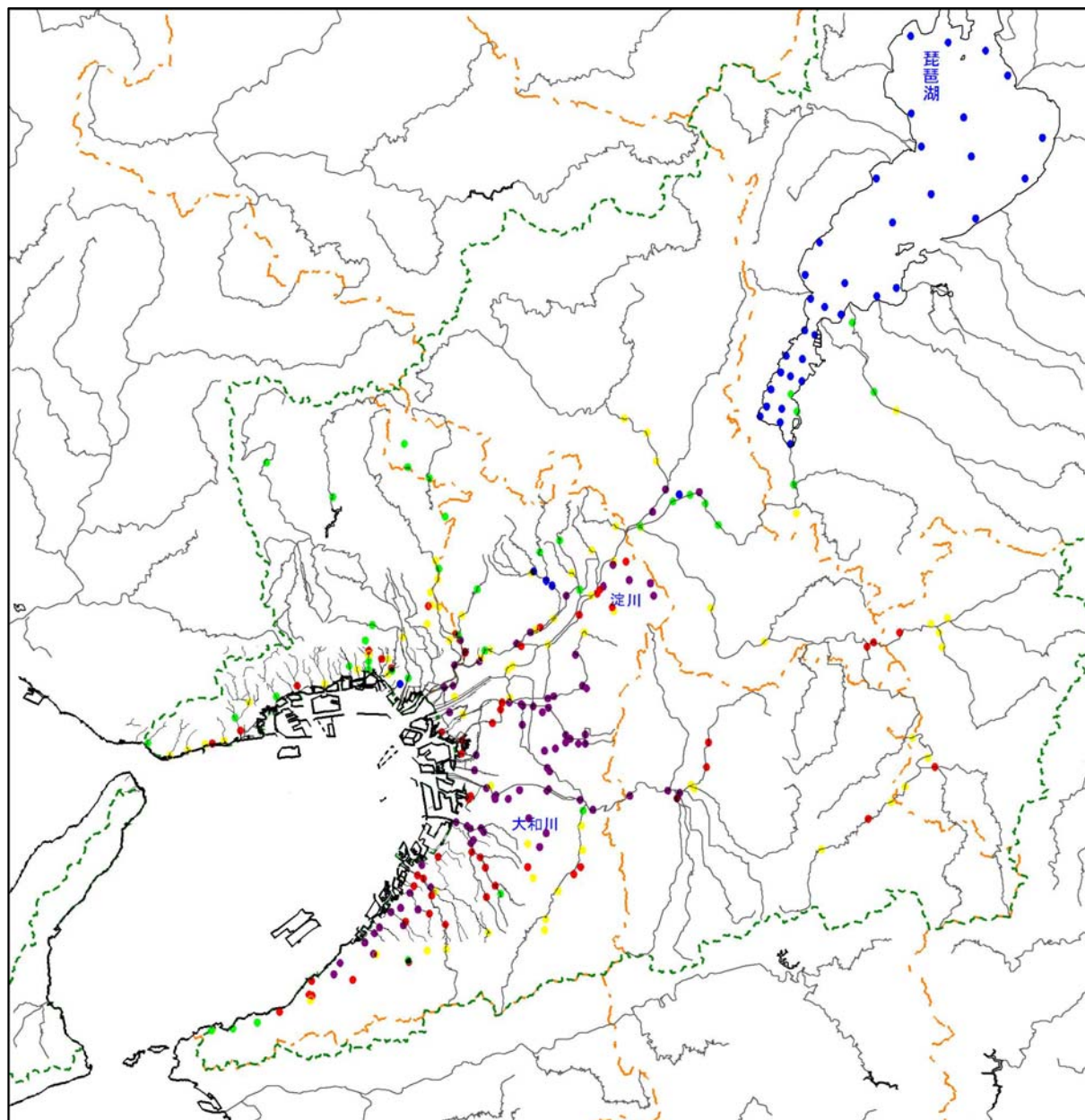
※黒色の実線は河川流路、緑色の破線は大阪湾集水域界、橙色の1点破線は府県境界を示す。

凡 例	
●	: > 8 mg/L
●	: ≤ 8 mg/L
●	: ≤ 5 mg/L
●	: ≤ 4 mg/L
●	: ≤ 3 mg/L
●	: ≤ 2 mg/L
●	: ≤ 1 mg/L

付図 1 水質の水平分布 (陸域 : COD)

参考資料 2：陸域の全窒素（T-N）

- ・陸域のT-Nは、琵琶湖ではほとんどの地点で0.3 mg/L以下の値を示していました。また、河川においては、2.0 mg/Lを超える値を示す地点が多くみられました。



※黒色の実線は河川流路、緑色の破線は大阪湾集水域界、橙色の1点破線は府県境界を示す。

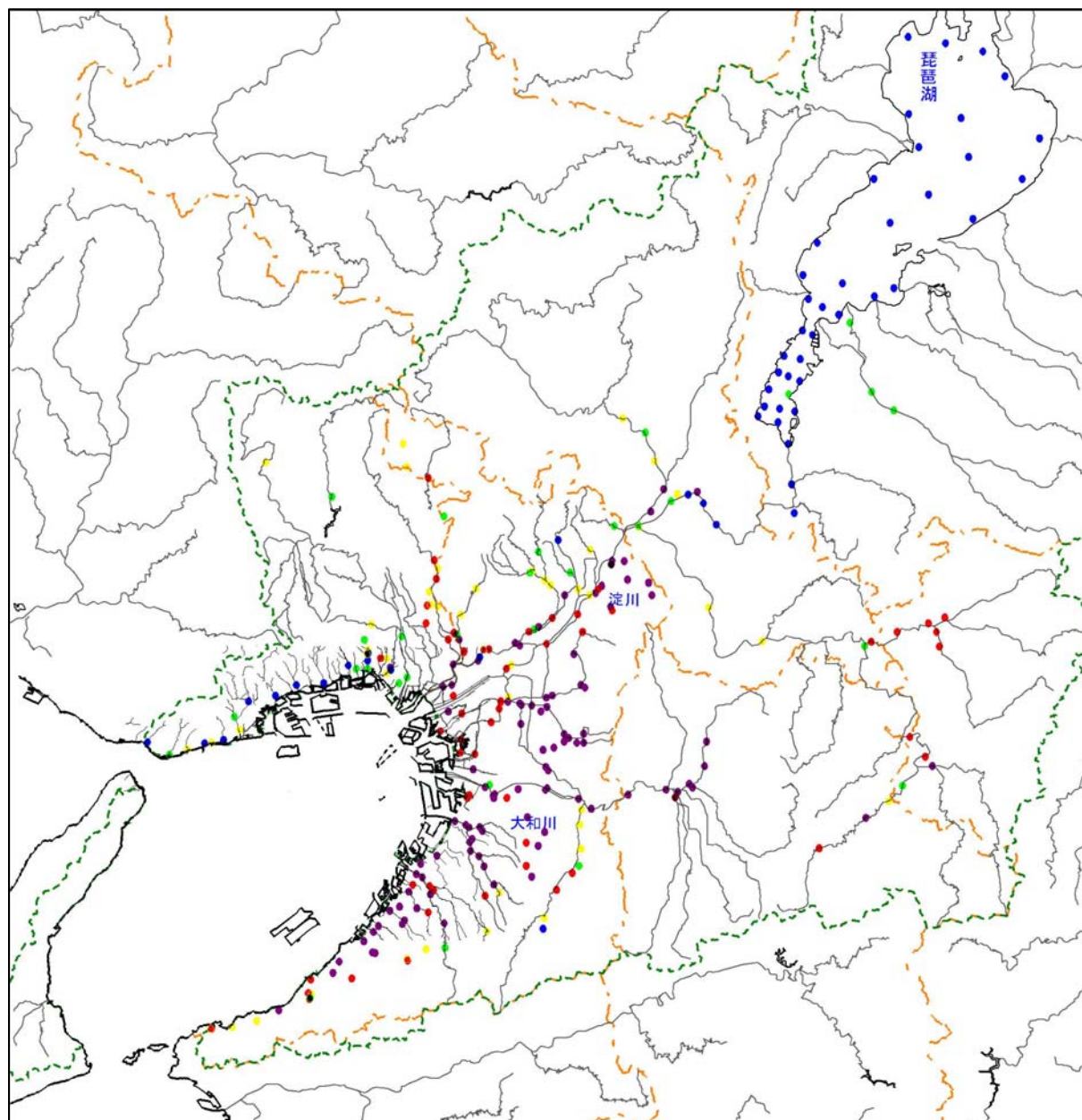
凡 例

- : > 2 mg/L
- : ≤ 2 mg/L
- : ≤ 1 mg/L
- : ≤ 0.6 mg/L
- : ≤ 0.3 mg/L

付図 2 水質の水平分布（陸域：T-N）

参考資料 3 : 陸域の全リン (T-P)

- ・陸域のT-Pは、琵琶湖では、ほとんどの地点で 0.03 mg/L 以下の値を示していました。また、河川においては、 0.2 mg/L を超える値を示す地点が多くみられました。



※黒色の実線は河川流路、緑色の破線は大阪湾集水域界、橙色の1点破線は府県境界を示す。

凡 例	
●	: $>0.2 \text{ mg/L}$
●	: $\leq 0.2 \text{ mg/L}$
●	: $\leq 0.09 \text{ mg/L}$
●	: $\leq 0.05 \text{ mg/L}$
●	: $\leq 0.03 \text{ mg/L}$

付図 3 水質の水平分布 (陸域 : T-P)